

法話資料文

『量りない思索を探る』

―曾我先生の譬喩的な文を通して―

●『児童の最大疑問』―生の從來するところ、死の趣向するところを知らず―

宗教は信仰（信心）が一番大切である。口先や、人真似ではない。其腹底から、湧き出でるものでなければならぬ。そんなら小供には、そんな腹から吐き出す様な、宗教心があらふか、とは、私共の心に浮ぶ所の疑問である。

「母ちゃん、私、何処から生れて来たのだらうネ！」是は可愛らしい、フツクリとした、美の神（小児）が、母ちゃん達の膝に抱かれて乳房をヒネリつゝ、何だか心配さうに問ふ、「大疑問」である。総別小児は、何かに就てうるさい程、問を起すもので、見る物、聞くもの、皆悉く珍らしい、面白い、可笑しい、不思議なもので、一として疑の種とならぬものはないが、其中で一番不思議でならぬのは、「自分は何処から来たのであらう。コンナまあ可愛らしい、善い子は、何処から生れたのであらう」と云ふことは、此上ない意味深き、重大なる疑である。其問を起す時は、心配さうに、一心に母ちゃんの顔を見つめて、其答を待て居るのである。所が大抵の母ちゃん達は直にこんな答をするでせう。「坊やは大根鼻で、拾ふて来たのよ」とか、「大きな鳥が抱て来て置て行たのよ」とか、「大河から流れて来たのよ」とか、云ふでせうが、小児は決して、コンナ事で安心するものではない。だから幾度も幾度も、つけまはりて、是事を問ふのでせう。さうすると五月蠅くなりて来るものだから、短氣の母ちゃん達は、直に「坊や小児の癖に、ハジケタ事を云ふものでないよ、真実に五月蠅い児だね」なんと、云つてはねつける。是は実に大きな間違である。

諸姉よ、世の中にまたとこんな高尚な、立派な問がありまじやうか。世の中に学問も、宗教も、つまり是大疑問を解釈せんが為に、外ならぬのである、是が分りたら仏だ。而して小児の時から、マワラヌ口で問ひ初むるのであるが、成人すると却て邪見になりて、忘れ勝なので、「馬鹿な問だ」とて、笑ふ様になるのだ。諸姉、持つべきは小児だ。この美の神様は実に後生の大善知識なのだ。邪見な母ちゃんに後生の催促をするのは実に小児である。

我々は何処から来た、何して是世に生れて来たか、と云ふことが分るなら、云何云ふ行をして、是世を渡るべきものであるか、と云ふことが分つて来る。而して又此世の中に生れて来た目的とか、所詮とか、云ふものも分つて来る。而して此世一生を終りて、今度は結局何処に行き、云何なるのであるか、と云ふことが分つて来るのである。是さへ分れば、一文不知の尼入道も知者である、最大知者である。乃至

仏説無量寿経下巻に、生のよつて来る所と、死の趣き向ふ所とを知らず。との玉ひた。責て十分な答が出来なく共、是疑丈けでも、常に忘れぬ様に、記憶したきものである。（明治三十年三月発行『家庭』より抜粋）

●『釈尊と我』―生の一念と死の一念の実験―

大聖釈迦降誕の時、唯我独尊を獅子吼し、入滅の時静に仏性常住を宣揚し給ひた。

驚く勿れ、われ等衆生は何人も生の初を思ふ時皆釈尊と等しく唯我独尊と獅子吼し、死の一念を思ふ時亦皆釈尊と同じく仏性常住を宣揚するであらう。されば死生の始終にありてはわれ等は全く大聖釈尊と同等である。

故にわれ等の釈尊と異なるは生死の中間の歳時である。何故に始終の二念のみ等しくして、中間に於て相同じくない乎。

釈尊の八十年は生の一念の無限の連続であつた。故に彼は念々に常に現在に死の一念を実験し、以て八十年入滅の時まで止まなかつた。故に生涯一貫して常に唯我独尊の自覚があつた。われ等は生の一念を遠く過去に葬り去り、随て最早は大自覚は全く消滅し去りたのである。一念の偉人は遂に凡人と化したのは此故である。

釈尊の八十年は又死の連絡である。故に彼れの降誕の一念より念々に当に死の一念を実験し、八十年入滅の時、静に平生の自覚を表白せられたるに過ぎぬ。故に彼は生涯一貫して常に仏性常住の信念に住せられたのであつた。

われ等は死の一念を遙に未来に遂ひやり、念々に死の門に向ひつゝあるを忘れて居る。彼は臨終の一念にならねば偉人の位に復することの出来ない所以是在る。釈尊は生涯一貫して念々に死生の前に立ち、われ等は死生を遙に過去未来に放逐した。偉人凡人の別是に生じた。

故に信仰の門に入る者は釈尊と同じく生涯一貫して念々に死生の前に立つて唯我独尊、仏性常住の自覚に住することが出来る。

親鸞聖人の宗教は過去を回想して釈尊と同じかりしを誇る教でもなく、未来を望見して釈尊と同じからんと欲求する教でもない。現在に彼と同等なりと自覚し、その絶大の栄光を感謝する教である。（『曾我量深選集』4巻232～233頁より抜粋）

●『墓』―法然の念仏は人生の最後念・親鸞は人生の初一念―

墓の碑文に往々「南無阿弥陀仏」と刻みつけらるゝ。誠に南無阿弥陀仏は人生を葬る墓である。南無阿弥陀仏は人生最後の帰着点、永久の安息所である。此文字を知ると否と、唱ふると唱へざると、念仏為本と叫んだ法然上人の墓も南無阿弥陀仏である。念仏無間とはねまはりた日蓮上人の墓も南無阿弥陀仏である。信と無信とに別なく、十方衆生は悉く南無阿弥陀仏の墓に永久に静寂に眠りて居る。

彼等は皆無限生命と無限光明との霊の親を要求し、その救済の要求の裡に、永久に救はれ。我々は常に無明長夜に迷悶しつゝある屍骸である。我が智慧の眼を開き、我が生命の泉を給する光寿二無量を親を要求する。我々は自己の究竟の墓としての如来を念ずることに依りて生くる。

法然上人は選択本願の念仏の中に久遠劫来の自己を葬つた。同時に自己の妄想の偶像なる聖道自力の諸教を一切葬つた。法然上人に在りては救済とは畢竟心霊

的自我埋葬に外ならないのである。

宗教の救済は一面には心靈の墓に曠劫以来流転し来りて現在せる自己、即ち屍骸の自己を埋葬するの謂である。而も墓なくしては我々は屍骸の始末に困しむ。自己の業界の屍骸は必ず自ら埋葬場を求めねばならぬ。此埋葬が宗教である、即ち念仏である。流転の自己の最後である、墓は更に生きんとする我々の厭ふ所である。

(それに対して) 祖聖は、茲に新しき人生の母としての宗教の積極的一面を開き給ひた。

自己に内観する時、久遠の自己は此墓の破壊を想はないものがあるか。「生きた屍骸」は墓を見せつけらるゝ程、苦しいなさけないことはないではないか。我々は生命を求むる、墓なんかは厭である。唯仕方がないのである。仕方なしの念仏である。誰か好んで念仏など唱へやう。久遠の我は念仏を一番好まない。我が衷心より念仏を唱へるのは能々の時に限る。

念仏は旧人生を葬る墓なると共に、新人生の母である。信の一念の裡に早や永久の新人生に包含せらるゝ。此こそ真の現実の人生である。此生ける信念は念々に新しき世界を生み、又新しき自己の眼光を開く。信念は常に必ず如来と浄土とを生む。此点に於て信念は人生の最終なると共に、又人生の最初である。

法然上人の念仏は人生の最終を教へた。親鸞聖人の信念は人生の最初を教へた。

「汝今人生の最後念に立て」、此れ法然上人の教ゆる所であり、「汝今人生の初一念に立て」、此れ親鸞聖人の教ゆる所である。前者は老人の宗教であり、後者は嬰兒の宗教である。前者は安息の宗教であり、後者は勇進の宗教である。

「称へよ、たすけん」の如来の本命は現実界には二面に現はれる。第一は自己の称ふる声である。自己の念仏の声の外に現実の本命はないのである。又第二には自己の唱へんと欲する意志である。「念仏申さんと欲ひ立つ意」である。前者は外的で、後者は内的であるが、此二つは全く一つである。此二つは一念同時である。若し内的意志なければ、声は行ではない。又念仏の表明なくば、意志は空念である。則ち信の一念は一面には称名であり、又一面には称へんと欲する信念である。(『曾我量深選集』2巻『墓』より抜粋)

●「曾我量深信仰坐談」——糸はお念仏、針は信心——

問 お念仏と信心とは、どういう関係ですか。

曾我 信心とは、たとえば糸に針をつけたようなもの。糸はお念仏、針は信心。いくらお念仏の糸があっても、信心の針がついていなければ着物を縫うことができない。針がなければ、いくら糸があっても着物は縫えない。いくらナンマンダブナンマンダブととなえても、信心がなければ助からん。お念仏は糸のごとし、信心は針のごとし。

信心と念仏とどういう関係にあるか、大体ハッキリせぬ。だから、糸と針のたとえで言えば一応ハッキリする。要するに、縫ってしまえば糸だけが残る。糸で着物はできるのですよ。縫ってからも針をつけておいたらけがしてしまう。しかし、いよいよ縫うときは針がなければ縫えぬ。これはまあ、一つの譬喩ですが

着物は糸で縫う。針で縫うのではないが、針がなければいくら糸があっても縫えぬ。糸に針をつけるから、糸が着物を縫うことができる。着物は糸で縫うもの、針で縫うものでないでしょう。針で縫ったらかわくて着られんでしょう。糸で縫うには違いないが、そこに針がないと絶えぬ。

われわれはお念仏で助かるに違いない。しかし信心という針がないと、お念仏で助からん。助かるのはお念仏で助かるのだが、信心がないとお念仏が出てこない。お念仏がお念仏のはたらきをせぬ。

仏さまは、われわれを助けんがために南無阿弥陀仏の不行を案じ出だしたまいて、この名号をとるものをお念仏に必ず助けようと誓わされた。だから仏さまは、お念仏をもって助けて下さる。「念仏衆生摂取不捨」という。だから私どもは、本當に助かりたければお念仏をとる。助かる必要がないからお念仏が出てこないのですよ。お念仏をもって助けて下さるが、お念仏がお念仏のはたらきするのは、信心というものがないと、お念仏がお念仏のはたらきをせんのです。『親鸞との対話』78頁抜粋)

●『日蓮論・三 知行不調和の自覚』—万行同歸の念仏—

我れ嘗て定家卿が月に対して、「天の原、思へばかはる色もなし、秋こそ月の光なりけれ」と歌ふを見て、深き興味を惹起するを禁ずる能はざりき。蓋し月は是れ一也、春夏秋冬共にあり、秋の月必しも清浄なるに非ず、而も月を賞する者必ず秋を取るは何ぞや。定家解して曰く、「秋こそ月の光なりけれ」と。抑も春は花の時也、夏は太陽の時也、秋は月の時也、冬は雪の時也。春の一切事物は悉く花を中心として、宇宙万有悉く花の為に存し、花王を中心とする。夏は太陽の世界、夏に至りて一転悉く輝々堂々たる東天の旭日を讃頌するに非ずや。秋に入るや、太陽忽ち其威光を失墜して、月の世界と転ず。秋の万有は悉く月の為に存するに非ずや。天の原に月ありと思ふは非也。是れ月を解せざる俗物のみ。天上を觀て秋月何くにかあると嘆ずる勿れ。秋月は独り天上に存せざる也。秋の山は是れ月に非ずや、秋の海は是れ月に非ずや、秋の菊を見る者、月を忘れて是が美を感ずるを得ず。独り夜のみ月の光に非ずして、秋の日中亦月の光也。哀れなる鈴虫の音は是れ月の光に非ずや、落葉の聲は是れ亦月の光に非ずや。悟り得たり、月は天上に存せずして、周囲の万有に存することを、秋全体月の光なることを。

吾人は一首の歌が秋全体の光なるを顯すの点に於て、限りなき靈感に打たれざるを得ざる也。秋の万有は是れ月也、秋の月は是れ秋の万有也、吾人は万有を見て初て月の真面目を觀るに非ずや。唯一箇の月と云ふ勿れ、月は則ち秋の万有なれば也。唯念仏と云ふ勿れ念仏は是れ秋月也、是故に親鸞は唯一念仏に依りて、泰然として其愚に甘んぜしに非ずや。(『曾我量深選集』2卷46、48頁より抜粋)

●『龍眼』―龍眼は念仏・念仏のみぞ誠也―

龍を画いて眼を入れずと云ふ。誠に龍眼は龍の生命である。唯一箇の眼を点ずると否とによりて、その死活は決定せらる。爾り唯一箇の眼である。

されど若し徒に一箇の眼を画くばかりで、此ぞ龍の全体であると云ふ人あらば云何。龍眼は龍身に依りてのみ龍眼たるを得る。

念仏は他力信仰の龍眼である。『唯念仏して弥陀にたすけられまいらすべし』である。唯此念仏のみ所信の行体であり、又能信者の生命である。念仏なき信心は眼を入れざる所である。所信の標的なく、又能信の生命もない。「念仏衆生摂取不捨」とは此謂である。而も若し此念仏を信仰の自覚より抽象し来りて、徒に高称し、紙面全体に一大眼を画いて、「汝此一大龍王を觀よ」と云はゞ云何。龍身と雲とを悉く抹殺せば云何。かゝる念仏は云何に勇壮に響き亘るとも、云何に幾万の愚民ををどかすとも、彼自身に自覚する所なくんば、此れ行ではない。虚仮の行である。行に似て行ではない。行の概念である。蓄音器と何の差がありや。行為と云ひ、行業と云ふは自覚ありてのことである。虚仮の行とは、自覚なき人形の声や活動である。

念仏は信仰の龍眼である。真の念仏には必ず信念と人生との二重の背景を要する。人生は雲であり、信念は龍身であり、念仏は龍眼である。此三は三のまゝが一である。唯一の龍が三と頭はるゝ。

信の龍は雲の人生を念々に創作しつゝ、而も身を此人生の雲裡に没入する。唯夫れ身の大部を雲に没する所に於て真に雲に乗じて六合に飛躍することが出来る。人生を離れたる宗教は此れ雲を離れたる龍である。而して宗教なき人生は龍なき雲である。龍の死と共に雲は散失し終る。而も若し念仏の龍眼の嚇々たる光なくんば龍と雲と徒に黒闇裡に葬られて仕舞ふ。唯一点の念仏の龍眼は、よく龍身と雲との壮大極りなき光景を照現し来る。

我々は單なる自己の眼を以て龍と雲とを見ることが出来ない。我々は龍眼の光に依り、龍眼が彼自身の相を照現することに依りて、茲に龍を見る。誠に龍を見るの眼は即ち龍の眼であつた。而して龍の眼が又直に我が眼であつた。龍眼は徒に龍眼でなく、直に又能觀の人眼であつた。能觀の人眼がそのまゝ所觀の龍眼である。觀照の妙味茲に在る。如来龍王は念仏の靈眼に依りて御自身を照し、又我々衆生を照し給ふ。我々は唯念仏の仏眼に依りて、如来の大精神攝取の仏に接する。「念仏申さんとおもひたつ心のをこる」は正に念仏眼に依る。（『曾我量深選集』4卷371〜373頁より抜粋）

●『山水の画を見て』―信心の水―

山水の画は極めて簡單である。彼方に遙に霞を帯びつゝ聳立せるは山である。此方に黒くゑがゝれたるは林である。而して此山と林との中間は全くの白紙で、無一物である。見よ、在る物は唯山と林とではない乎。而も不思議にも我等は是を「山林の画」と呼ばずに「山水の画」と名くるは何故である乎。水よ水よ、汝

は何処に在る乎。若し此軸面より山を取り、更に林を拭ひ去らば、全く白紙の軸となり終るのである。けれども我々は啻に山水と呼ぶばかりでなく、實際上山水と感ずるのである。我は彼方の山を仰ぎ、此方の林を觀る時、不思議にも此二者の中間の空虚の所にたゞえたる水を觀るのである。なきが如くにして在るは山水の水である。私が思はず水よ水よと喚んだのは、此山林の中間に自然に実現せる満満たる水に向て発したる驚嘆の言であつたのであります。

雲霞の間に髣髴として見ゆる山は是れ西方安樂世界の教主如来の超世の本願である。近き此岸の鬱然たる森林は娑婆生死の園に迷ひ悶えつゝある我々の胸中八万の煩惱の林である。仰いで大悲本願の山を拝し、俯して生死煩惱の園林を見る時、我はいつのまにか法界にたゞえたる信念の水に驚かざるを得ないのである。信念は如来の本願と自己の罪惡との間に自然に顯現したる不可思議の存在であつたのであります。

画を解せざるものは此の山水の画を嘲つて、山林の画と謗り、遂に筆を呵して水を描がゝんと企つるであらう。かくて幽默なる山水の靈境は忽に去りて、我等は忽ち濁惡なる現實世界に還らねばならぬ。嗚呼奇なる哉や、水をゑがゝざりし時、已に水現はれ、水をゑがく時、啻に水が枯れたるのみならず、山も林も悉くその意義を破壊せられて仕舞つて、根本的に山水の画なるものが滅亡したのである。

蓋し画に於ける山と林とは実である、独り水は虚である。而して虚なる水は独り存在することが出来ずして、全く実なる山と林とに依りて現はるゝと共に、已に一度現はれ終りし上はその妙用無碍自在にして、実以上である。故に山水の画の中心は林でなく、山でなくして、虚なる水である。

自己の罪惡の機の深信の林にすわりて、遙遠なる如来の本願の山嶽を仰ぐ時、奇なる哉や、わが坐せる煩惱の林の下まで信念の浄水は入り満ち下さるのである。此水は林の下より湧き出でたやうであるが、その実あの天に接する山嶽より湧き出でたるものである。山やその深と遠と大とをきはめて、信仰の水は清浄と寒烈とを極めて不尽である。此水や本願の山より生じつゝ、却てそれに崇嚴と清純とを加へ、又煩惱の林をして千紫万紅の色を添へしむるものである。若し此信念の水がなかつたならば、如来と云ひ煩惱と云ふも所謂一箇の觀念遊戲の絵画に過ぎなかつたのであらうが、今やわれ等はかの本願の山とこの煩惱の林との間に信念の水をみる時、忽ち觀念遊戲の範圍を超越して、歓喜報恩の実生活に入るのであります。

蓋し水の妙味はゑがゝる所に在る。信念の妙旨も亦不可思議の所に在る。親鸞聖人言く「聖道門の人はみな、自力の心をむねとして、他力不思議に入りぬれば、義なきを義とすと信知せり」と。ことさらに心をつくろひて清浄真実の心とならんとつとむるは此れ墨を以て水をゑがく自力の人である。義なきを義とす、自己のはからはざる所に如来の不可思議の御はからひがある。「他力の信水」は自然に入り満ち下さるゝのである。

慚愧、讃仰の宗教は此れやがて信念の宗教である。信念は本願の山でなく、又煩惱の林でない。唯山より出でゝ近く林の下に来る所の水である。（『曾我量深選集』2卷230〜234頁より抜粋）

●『二つ鏡、行信相映』―限らない自覚内観―

相対向せる二つの鏡は、相互にある一方の鏡の影が他の一方の鏡に映る、その映った俤がまたさきの鏡に映る。かやうにこれが限りなく重々無尽に互に映つて来る。

例へば、私は今金沢に居る、金沢の一地点に於て金沢の地図を描くとする。もし金沢以外の地点、たとへば京都に居つてこの金沢の地図を描くことは至極簡単なもので、最初の予定方針に随つて成果は決定せられるものでも何でもないことである。所が私が金沢の中に居つて金沢の地図を描くと云ふことになる。と簡単に行けない。何故かなれば、地図を現に描いて居る自分は現に描かるべき金沢に居る自分である。而もその描かるべき金沢は現にそれを描きつゝある所の自分の居る金沢である。さうすると金沢の地図を現に書いて居る自分と、その自分の居る金沢と云ふものが重々無尽にお互に關係して来る

そこで此金沢の地図を書くことと云ふことは詰り自分を描く、現に自分を描きつゝある、自分自身を描くと云ふことは、画いて居る自分は、いつまで画いても画き尽せない自分を見るが故に画く自分は画くと云ふ努力の意識を超えて、限りなく自己を描くことに努力して止まざらしめられるのである。茲には自己描写の無限の力は誠に内に自然に湧く所の止むに止まれぬ情意の泉であり、新に描かれたる自己は、描く自己を超え、描く自己をして描かざるを得ざらしむる情意の力それ自体である。かくして描かるゝ自分に於て描く自分の久遠の姿を見出す時、その二つの自分は全く一つなのです。

鏡体は二枚なれども二枚の各の鏡に於て無量無数の鏡影がある。こつちに百万の鏡があればあつちにも百万の鏡がある、乃至こつちに百億の鏡があればあつちにも百億ある。その境地を「内観」「自覚」とか云ふ意義がある。

かう云ふ工合に云へばよくお解りになるだらうと思ひます。先きに申しました合せ鏡を見ますに、何千何万何億だか知らん無数に相互に影が映る。それが前ならず後ならず一念同時に、鏡体は二枚なれども二枚の各の鏡に於て無量無数の鏡影がある。こつちに百万の鏡があればあつちにも百万の鏡がある、乃至こつちに百億の鏡があればあつちにも百億ある。その境地を「内観」「自覚」と謂ふ。それが詰り兆載永劫の修行と謂ふ、是で法蔵菩薩がえらい分つたやうでありますけれどもさう分つた訳でないのでありまして、たゞ説明して見るだけのことです。兆載永劫の御苦労と云ふと徒歩裸足の御苦労、草鞋を履いた御苦労かと思ふが、そんなことではない、大変深い「内観」と云ふやうな言葉で表はすならば余程近くなりませんかと思ひますが、内観と云ふ理窟になつて又本当の精神に背いて来るかも知らん。二枚の鏡を合せると云ふとそこに互に相映じて来る。だからして自分を内観すると云ふことは全世界の一々の事物に於て自己の内生活の姿を見せしめられることであつて、眼をつぶらなければ内観出来ないのではない、正見の眼を開いて内観する、「内観」と云ふ意味はかう云ふ風に考へなければならぬ。又かうでなければ内観と云ふことは全然成り立たぬと云ふことを申すのであります。(『曾我量深選集』10巻236―238頁より抜粋)

●『大自然を胸に』―私の肉体は法蔵菩薩の道場―

我々は生れながらにして深重の業の所有者である。わが霊は未生以前に深重なる言教を全身に沁みて生れた。我は如来の大願業力が此肉体の一毛孔にも充ち満てることを思ふ。噫聞の業報よ、而して闇にかじやける宿業よ。私の肉体は是れ現在の法蔵菩薩である。法身説法の道場である。我は小なる意識に依りて自己を制限すれども、肉体は是れ大なる我である。

我は我が肉体を内観して、原始人、自然人、種族人、十方衆生を見る。肉的生身が現実の根本自我である。此肉身に無始以来の祖先の言教がある。我々の一挙一動悉く無意識なる言教の所発でないか。無始以来の生類の歴史は私の自然の言教である。祖先の内的経験は悉皆網羅して私の無意識の言教である。我は専ら此厳肅深重なる言教に発遣せられねばならぬ。

子々孫々の相続は我々の未生以前の無意識の教である。我々は此不可思議なる「經典」を持して誕生した。誕生することそのことが已に此「經典」の力である。

如来はその皮を紙とし、その骨を筆とし、その血肉を墨汁として、生ける「聖教」を創作し給ひた。その「聖教」は私の肉体である。肉の声は聖教の自発である。天親論主が声を教体とすると云はれたのはその謂である。名号為体とは声を体とするの謂である。『大無量寿經』は此肉体の体験の「經典」である。釈尊の体験の表明である。此体験は十方衆生の体験である。

観念の念仏なんか駄目である。体験の念仏でなければならぬ。我等の祖先の体験は諸仏、菩薩、諸天、諸神の名となつた。而して遂に南無阿彌陀仏となつた。まことに弥陀の名号は五劫永劫の正覺の果名である。まことに十方衆生の創造である。爾り全人類の創造中に此に比すべきものがあるか。

まことに念仏の一行ばかりは発遣還相の教にして、招喚往相の行である。念仏ばかりは尽未来際の全人類の創作である。爾り私の肉でありて、又霊である。私の教であつて又行である。実に往還共に唯一念仏である。念仏は観念遊戯であつてはならぬ。それは大願業力の象徴で又表現である。全人類の現実的の絶対唯一の労作であり事業である。

教の肉を離れて行の霊はない。教と行とを離れては、その証は自性か唯心かであり、その信は定心か散心かである。（『曾我量深選集』3巻210頁～211頁より抜粋）